

日本都市計画学会

学 会 賞

特別功労表彰 功績賞・国際交流賞

2019年 年間優秀論文賞

受賞一覧ならびに授賞理由書

公益社団法人

日本都市計画学会

目 次

1. 学会賞

1) 受賞作品	1
2) 選考経過	2
3) 授賞理由	3

2. 特別功労表彰 功績賞・国際交流賞

1) 受賞者	9
2) 選考経過	10
3) 授賞理由	11

3. 2019年 年間優秀論文賞

1) 受賞論文	12
2) 選考経過	12
3) 授賞理由	13

日本都市計画学会 学会賞受賞者・受賞作品

(受賞者敬称略)

<石川賞>

「東京の都市づくり通史」の編纂と刊行

大原 正行・岸井 隆幸・伊藤 登・大沢 昌玄・東京都都市整備局

<計画設計賞>

気仙沼内湾ウォーターフロントの地域主体による復興デザイン

-港町の景観・文化の継承と安全性の確保を両立した都市デザインの実現-

内湾地区復興まちづくり協議会

早稲田大学 都市・地域研究所

内湾ウォーターフロント設計チーム

宮城県・気仙沼市

学術研究都市の拠点として地域と共生する九州大学伊都キャンパス

九州大学

坂井 猛・鶴崎 直樹

外井 哲志・出口 敦

<石川奨励賞>

日本の砦都～石灰石が生んだ産業景観

岡田 昌彰

高齢者問題に着目した雪国の地域計画課題に関する一連の研究および活動

沼野 夏生

すてきに、東京

2040年+の東京都心市街地像研究会 女性ワーキングの会

<論文奨励賞>

Shrinking Housing Market and Long-Term Vacancy: A Synthesis

鈴木 雅智

まちづくり市民活動団体の人材マネジメントに関する組織論的研究

藪谷 祐介

震災遺構の成立過程における合意形成：東日本大震災を事例とした時空間および認識形成の分析より

西坂 涼

階層的な空間構造を考慮した移動コストを最小化する都市形態

近藤 赳弘

大都市圏スプロール市街地におけるウォーカービリティに着目した都市評価指標に関する研究

加登 遼

町並み保全地域における自主規範を軸とした空間的・社会的調整システムの構築に関する研究

－「妻籠宿を守る住民憲章」に着目して

石山 千代

地域の自律的な復旧に寄与する企業の特徴に関する研究

福本 墨

小規模多主体事業連鎖と都市基盤整備による複線型復興まちづくりの実践的研究

阿部 俊彦

紐帯と企業立地 -企業間のつながりに基づく立地とイノベーションの解明-

福田 峻

日本都市計画学会

学会賞 選考経過

2019 年度学会賞は、会員が推薦した石川賞候補 2 件、計画設計賞候補 2 件、石川奨励賞候補 2 件、論文奨励賞候補 12 件、計 20 件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全 16 名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、授賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川賞 1 件、計画設計賞 2 件、石川奨励賞 3 件、論文奨励賞 9 件の授賞を決定した。

(参考)各賞の授賞対象

石川賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、都市計画の進歩、発展に 顕著な貢献をした個人または団体を対象とする。

論文賞

都市計画の進歩、発展に顕著な貢献を認められる研究論文を近年（概ね過去 3 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

計画設計賞

都市計画に関する計画、設計、事業などに関する近年（概ね過去 3 年以内）の作品で、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をしたものを対象とする。

石川奨励賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、今後の都市計画の進歩、発展に寄与しうる貢献をした個人または団体を対象とする。

論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近（過去 1 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

石川賞	
作品名	「東京の都市づくり通史」の編纂と刊行
受賞者	大原 正行 岸井 隆幸 伊藤 登 大沢 昌玄 東京都都市整備局
授賞理由	<p>本作品は、公益財団法人東京都都市づくり公社が、旧都市計画法制定 100 年の節目に、これまで東京都及び同公社が行ってきた東京都の都市計画についての通史として取りまとめたものである。本作品は以下の点で、学術的価値、資料的価値が高い。</p> <p>1) 明治以降今日までの東京都における都市計画の経緯を、総括的に取りまとめていること。特に都市計画部局の業務範囲にとどまらず、鉄道から下水道まで総括的に取り上げられていること。</p> <p>2) その際、時代時代の社会的背景を示しながら都市計画の動きを取りまとめ、社会と連動した都市計画であることが示されていると同時に、年表を用いることで同時代の動きを正確に把握することができること。</p> <p>3) さらにその上で分野別、テーマ別に主要な政策を取り上げ、担当の実務担当者による記述がなされることにより、時代の雰囲気をも十分に感じさせるものとなっており、分野別の立場からみても記録的価値が高いこと。</p> <p>これらは、東京都を対象区域とした都市計画の歴史の文献として類例のないものである。以上の点から、日本都市計画学会石川賞に相応しいものであると判断した。</p>

計画設計賞	
作品名	気仙沼内湾ウォーターフロントの地域主体による復興デザイン -港町の景観・文化の継承と安全性の確保を両立した都市デザインの実現-
受賞者	内湾地区復興まちづくり協議会 早稲田大学都市・地域研究所 内湾ウォーターフロント設計チーム 宮城県 気仙沼市
授賞理由	<p>本計画は、東日本大震災にて被災した気仙沼内湾地区に、防波堤と一体化した海岸公園、観光商業施設と交流プラザを整備するものである。市民が主体となって計画をすすめ、海と町が一体となった都市デザインによる港町の景観の再生に加えて、被災地における活動事業の復興にも貢献し得る機能用途を実現している。</p> <p>防潮堤の計画に対して、津波に対する安全性の確保と、地域固有の景観・文化の継承のふたつを両立させるために要した各種の調整を行った計画プロセスには、津波災害の被災地に対する復興デザインとして新規性が認められる。</p> <p>また、地域住民と行政の協議による丁寧な合意形成を経て計画が策定され、複数の所有にまたがる施設の整備後の運営については、まちづくり会社を中心となってエリアマネジメントをすすめている点も評価できる。</p> <p>以上、津波災害の被災地における景観再生、活動事業の復興とその継続的な運営のしくみづくりを実現させた復興デザインとして日本都市計画学会計画設計賞に相応しいと判断した。</p>

計画設計賞

作品名	学術研究都市の拠点として地域と共生する九州大学伊都キャンパス
受賞者	九州大学 坂井 猛 鶴崎 直樹 外井 哲志 出口 敦
授賞理由	<p>九州大学伊都キャンパスは、272haの広大な敷地に延べ床面積52万m²、学生・教職員18,700人を擁するキャンパスとして2018年に移転完了した事業である。2001年の新キャンパス・マスタープラン策定から移転完了に至るまで17年の歳月を費やし、学術研究都市の拠点として、キャンパスを周辺の土地区画整理事業等と調和させ、地域社会や地域環境と共生する大学キャンパスを実現している。とりわけ、優れた点は以下である。</p> <p>①大学改革の内容を反映するとともに、学内外の各種分野の専門家の参加によって、社会実装の場として大学を位置付け、文理融合型の施設群を構成するなど、複合的な機能と高質なデザイン、マネジメントを実現している。</p> <p>②地形や景観、環境に配慮したキャンパス計画という観点のみならず、キャンパスを環境保全の実証実験の場として機能させている。</p> <p>③地域と共生する大学に相応しい検討体制を計画の初期段階から構築している。</p> <p>これらは、今後のキャンパス移転事業および大規模開発の模範となることが考えられ、都市計画の進歩・発展に顕著な貢献をしたものと認められる。以上の点から、日本都市計画学会計画設計賞に相応しいと判断した。</p>

石川奨励賞

作品名	日本の砒都～石灰石が生んだ産業景観
受賞者	岡田 昌彰
授賞理由	<p>本書は、著者による一連の産業景観研究の一翼を担う著書である。石灰岩鉱山を中心に形成された秩父、宇部、上磯など石灰石鉱山を中心に形成された工業都市を「砒都」と名付け、日本各地の砒都を巡りながら、セメント工場や鉱山を含むテクノスケープに形作られた産業景観の諸相のみならず、それを背景に育まれてきた砒都特有の祭事や歌といった無形の地域文化についても言及した労作である。</p> <p>まず、石灰岩鉱山を中心とする鉱山町を「砒都」と名付け、これに着目した点が独創的である。また砒都の足跡が日本の近現代の産業発展の軌跡に重なることを指摘しこれらの文化的価値を明らかにしたことは先駆的試みである。さらには、北海道から沖縄に至るまで国土全域にわたる緻密な現地調査を行い、砒都の魅力を活写しており、その視点と方法論は独創的である。</p> <p>以上より、同書のユニークな視点の提示や研究手法の展開を通じ、都市景観研究の進歩・発展に寄与する貢献をしており、日本都市計画学会石川奨励賞に相応しい内容を十分に有していると判断した。</p>

石川奨励賞	
作品名	高齢者問題に着目した雪国の地域計画課題に関する一連の研究および活動
受賞者	沼野 夏生
授賞理由	<p>受賞対象の論文・業績・作品は、都市計画 342 号（2020）所収「雪国の高齢者の実態と課題—高齢世帯に着目して—」を含む論文等 7 編であり、戦後、急速に高齢化が進んだ雪国における地域計画や都市計画の課題を多様な側面から検討し、事例を取り上げつつ、あるべき対策の提言にまで踏み込んだ内容となっている。具体的には、高齢者世帯の著しい増加に伴う除雪の担い手不足と人身雪害の頻発や、その背景となる都市・地域構造の変容の問題を実証分析により明らかにしている。また、共助除雪の復権、集落のレジリエンスの再評価、住み続け、住み継ぐための雪国地域空間のあり方などに関する展望や提案を示している。</p> <p>よって、高齢者問題に着目した雪国の都市計画、地域計画に関する独創的、かつ啓発的な本業績は、今後の都市計画の進歩、発展に寄与しうる貢献をしており、日本都市計画学会石川奨励賞に相応しいと判断した。</p>

石川奨励賞	
作品名	すてきに、東京
受賞者	2040 年+の東京都心市街地像研究会 女性ワーキングの会
授賞理由	<p>この書籍は、不動産・建設等の民間企業 13 社に勤務する女性 29 名によるワーキングの会が、約 4 年間に及ぶ活動の成果をとりまとめたもので、美しく親しみやすい装丁の本である。特に、東京という都市の独特の特徴をとらえて、空間や暮らしを楽しめるものにするための提案が、専門的なグラフやバックデータを交えていきいきと示されるとともに、洗練された写真や絵が豊富で、体裁も工夫されており、都市計画実務の専門書としての質の高さとともに、男女を問わず、一般の読者にもわかりやすく読みやすい点が高く評価された。</p> <p>審査の過程では、当初、女性だけのグループによる作品である点こそが称賛に値すると、審査に関わった委員全員が考えていた。しかし、審査が進む中で、女性であることを殊更に強調することは公正な観点とは言えないのではないかという意見が出され、その見解に委員全員が賛同した。そこで、改めて審議したところ、4 年間、13 社、29 名という長期間、異なる組織、多人数の、年齢やライフスタイルも異なる多様な社会人が、本業を一步超えてコラボレーションし、さらに多くの人を巻き込んでいくというプロジェクトの進め方と成果そのものも、男女の構成とは無関係に、これからの都市計画の進め方を体現するプロジェクトマネジメントの実例として、優れた事例であると認識された。</p> <p>以上のことから、本書は「都市計画に関する独創的な業績」であり、「今後の都市計画の進歩、発展に寄与しうる貢献」と認められ、今後の活躍にも期待して、日本都市計画学会石川奨励賞に相応しいものと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	Shrinking Housing Market and Long-Term Vacancy: A Synthesis
受賞者	鈴木 雅智
授賞理由	<p>本論文は、人口減少期の空き家発生について、一時的な需給バランスにより生じる市場空き家と住宅市場での処分が困難な長期放置空き家を明確に区分した上で、後者に着目した理論的枠組みを構築するとともに、これまでの土地利用モデルに耐久性・維持管理費用を組み込むことにより、需要縮小期の住宅市場の特性を明らかにする分析枠組みを提示している。また、東京都市圏を対象として実態把握と実証分析を行い、建物特性・立地条件に応じた住宅市場での流通や公的な有効活用の可能性を提案している。</p> <p>都市計画・建築学、経済学にまたがる学際的な住宅研究分野に、理論構築と実証分析の両面から取り組み、人口減少期の課題解決に資するアプローチを見いだした点に優れており、都市計画分野へのさらなる貢献も期待できることから、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	まちづくり市民活動団体の人材マネジメントに関する組織論的研究
受賞者	藪谷 祐介
授賞理由	<p>本論文は、脆弱な組織体であるまちづくり市民活動団体が継続的に活動していける事が、今後のまちづくりにおいて重要であるとの問題意識のもと、その実現に向けた理論構築と戦略的・実効的なマネジメント技術の開発に取り組んだものである。</p> <p>そのために、市民活動団体の構成員の役割分担、役割構造、ならびに構成員の担う役割と参加動機の関連性といった切り口から科学的分析により可視化するとともに、まちづくり市民活動団体の役割構造モデルを構築し、その組織メカニズムを構成員が「参加動機」を満たすことのできる「役割」を担うことによって成立すると解明した。</p> <p>これらの研究の視点は、大変有用で新規性もあり、また、基礎理論構築を果たした点は非常に高く評価でき、かつ社会技術として実装していくことまでの発展性も期待できる。</p> <p>以上の理由から、本論文は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	震災遺構の成立過程における合意形成：東日本大震災を事例とした時空間および認識形成の分析より
受賞者	西坂 涼
授賞理由	<p>本論文は、東日本大震災の震災遺構を対象に、その成立過程について、事例を含め、広域的・網羅的かつ同時期に保存された実態や整備過程を市民意見の聴取に着目して網羅的に明らかにしたものである。震災遺構は構造物そのものだけでなく、被災の痕跡の解釈や関係者の体験談等の情報が合わせて価値を持つという観点から、震災遺構の保存や整備過程のみならず、付加される情報の形成過程を市民や自治体の認識の形成に注目している点が独創的な点であり評価できる。</p> <p>本論文は、他に類例も少なく、国際的にも萌芽的段階にある災害遺構関連研究において、市民との合意形成に着目し、長期的に維持管理・活用がなされる災害遺構の整備に貢献しようという試みであり、加えて資料的価値も十分に備えている。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞の相応しい内容を十分に有していると判断した。</p>

論文奨励賞

作品名	階層的な空間構造を考慮した移動コストを最小化する都市形態
受賞者	近藤 赳弘
授賞理由	本研究は、都市内の移動距離が短いコンパクトシティを想定して、移動コストが最小となる都市のかたちを数理的なモデルによって解析する研究である。3次元都市モデルの要素に多層の床の概念と複数の拠点配置を加えるといった新たな工夫を導入することによって、既往のモデルの弱点の改善を図り、数理的な基礎理論の研究としての到達点を進展させている。研究プロセスにおいて、力量が要求される理論式の膨大な展開など、丹念で地道な計算を積み上げた結果から結論を得ている。結果の実現性や実用性はともかくとして、このような研究姿勢は今後の解析分野のみならず都市計画全体にとって重要であろう。研究の将来の発展性も考慮して、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	大都市圏スプロール市街地におけるウォーカビリティに着目した都市評価指標に関する研究
受賞者	加登 遼
授賞理由	<p>本研究のタイトルは、都市評価指標に関する研究とされているが、都市評価指標を用いて、大都市郊外部における人口減少下の都市計画の在り方に関する研究と考えられる。特に人口減少に伴う都市の縮退について、地域をどのように評価していくのかは、重要な課題であり、そこに地域のウォーカビリティを切り口に評価を行った本研究の意義は高い。またその結果としてこれまで否定的な文脈で扱われてきたスプロール市街地を再評価し、スプロール市街地におけるスマートシュリンクに対して、新たな知見を与えた。</p> <p>今後、人口の急速な減少によって、同様の問題は多くの地域で課題になるが、本研究はアクションリサーチとして、都市にかかわりながら研究を進めてきたことから、さらに研究の発展が期待できるという点で、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞

作品名	町並み保全地域における自主規範を軸とした空間的・社会的調整システムの構築に関する研究 —「妻籠宿を守る住民憲章」に着目して
受賞者	石山 千代
授賞理由	本研究は、町並み保全のパイオニア的存在である妻籠宿を対象として、自主規範を軸とした空間的・社会的調整システムを構築する方法及びその意義を「妻籠宿を守る住民憲章」の事例研究を通じて提示したものである。既知の情報や事象と、精力的な文献とインタビュー調査によって得た新たな情報を元に、保全活動に関わる主体の意識、社会認識、価値観に踏み込んだ空間的・社会的調整システムの構築方法、運用と役割を論じている。規制力のない自主規範である住民憲章の意義を、形に見えづら側面に注目しながら多角的に捉えることで、地域自治としての町並み保全の意義を提示するという研究視点は新規性に富む。また対象地である妻籠宿はもとより他事例においても、町並み保全という地域活動の価値と意義を明文化された形で共有、継承するための資料的価値が高い成果となっている。以上より本研究は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞	
作品名	地域の自律的な復旧に寄与する企業の特徴に関する研究
受賞者	福本 壘
授賞理由	<p>本研究は、災害後の緊急対応や復旧のプロセスにおける地域の企業の役割に着目し、企業による復旧活動支援を「業助」と名付け、東日本大震災後の宮城県岩沼市における企業の「業助」の実態を調査するとともに、そのような役割を果たした企業の特徴に関する定量的な分析を行ったものである。</p> <p>企業による復旧支援の実態、意識等から、企業が復旧活動支援に関わる条件を実証的に明らかにした。具体的には、地元にはルーツを持ち災害前から地域に関連する活動を行う企業ほど「業助」を行っているという結果を導いている。</p> <p>企業による「業助」の特性と、土地利用や立地、あるいは平常時の活動特性等との関係については明らかにされてはいないが、企業による復旧活動支援に着目したユニークさ、丁寧な実証分析、得られた知見の有用性は高く評価できる。</p> <p>よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	小規模多主体事業連鎖と都市基盤整備による複線型復興まちづくりの実践的研究
受賞者	阿部 俊彦
授賞理由	<p>本研究では、宮城県気仙沼市内湾地区を対象としたアクションリサーチをもとに、小規模多主体事業連鎖の有効性を検証した上で、そうした方法と都市基盤整備による複線型復興まちづくりのシナリオを一般モデルとして提示している。また、新宿区を対象として、事前復興WSを実施し、複線型復興まちづくりを事前復興WSをつうじて検討することの有用性や、GISデータベースをもとに3次元CGを作成することの学習効果に関する有用性も検討している。</p> <p>これらの分析・考察においては、アクションリサーチをもとにした丹念な記述分析、精緻な理論構築や計画論への展開など、学術研究として評価できる点が多く存在している。加えて、今後の復興まちづくりの実践において有用な具体的な知見も見出しており、都市計画研究としての価値も高い。</p> <p>よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	紐帯と企業立地 -企業間のつながりに基づく立地とイノベーションの解明-
受賞者	福田 峻
授賞理由	<p>この研究は、企業と他の主体との継続・反復した結びつきを「紐帯」(ちゅうたい)と定義し、企業の立地やイノベーションと「紐帯」との関係性を解き明かすことに挑戦した意欲的な研究である。</p> <p>本研究論文には、ユニークで興味深い内容が多くあり、例えば、企業間の取引関係などを「明示的紐帯」、人と人の会合などを「暗黙的紐帯」と呼び、信用調査会社が持つ膨大な企業データ、飲食店の集積状況、企業の社史の読み込みといった多様なアプローチによって解明した点や、イノベーションを「ルーチンからの逸脱」と定義し、既往研究の多くが対象としてきた技術革新だけでなく、他社の模倣や新規の取引関係といった「低次のイノベーション」も含めて計量的な分析を試みた点などがあげられる。このように、発想の独自性と論理展開の面白さが各所に認められ、分析に用いたデータにも厚みがあり、優れた研究業績であると認められる。</p> <p>以上のことから、将来性・発展性が顕著な研究論文と認められ、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しい研究業績であると判断した。</p>

日本都市計画学会 特別功勞表彰 功績賞・国際交流賞受賞者

(受賞者敬称略)

<功績賞>

安田 丑作 神戸大学 名誉教授

<功績賞>

彭 光輝 (Kuang-Hui Peng) 台湾都市計画学会 元会長・台北科技大学名誉教授

日本都市計画学会

特別功労表彰 功績賞・国際交流賞 選考経過

2019年日本都市計画学会特別功労表彰 功績賞・国際交流賞は、理事・監事・会長アドバイザー会議メンバー各位に候補者の推薦を募ったところ、候補者の推薦があった。これを受け、表彰委員会（委員全10名）が慎重に検討した審査結果を理事会に諮って、功績賞1名・国際交流賞1名の授賞を決定した。

(参考)功績賞の授賞対象

功績賞

長年にわたって都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者でその貢献が社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

功績賞

長年にわたって都市計画の国際的交流に携わり海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

功績賞	
受賞者	安田 丑作（神戸大学 名誉教授）
授賞理由	<p>安田丑作氏は、2008年3月に神戸大学を定年退職するまで、ほぼ40年にわたり建築・都市設計・都市計画に関する研究と教育に従事し、その間、多岐にわたる研究領域における調査・研究活動の傍ら、神戸市や阪神間諸都市での幅広い都市計画・都市政策の立案と運用の場においても専門家として多大な貢献をされた。</p> <p>都市景観研究の分野では、早くから景観構造の分析、計画立案、施策評価に関する一連の理論的・実践的研究に取り組み、阪神・淡路大震災後には、神戸市をはじめとする被災自治体における各種の復興計画などの政策立案に尽力するとともに、復旧・復興に関わる数多くの調査研究に精力的に取り組んできた。被災直後には、日本都市計画学会関西支部が母体となって、同本部学術委員会ならびに日本建築学会近畿支部都市計画部会が参加する「震災復興都市づくり特別委員会」の副委員長を努め、被災地全域におよぶ被害実態緊急調査を担い、その後、被災市街地の復旧・復興動向の実態把握を行うとともに、再建の定点調査による地区レベルでの詳細な復旧・復興プロセスの分析を行った。さらには、住宅再建と共同建替事業の検証、共同建替事業におけるコミュニティ形成に関する研究などにも取り組み、これらの一連の研究成果をもとに、市街地における単発的な個別更新や小規模共同建替を街区単位で連鎖的に進めていく「街区協同再建システム」とよぶ計画提案をまとめるとともに、被災地における復興まちづくりへの数多くの具体的提言を通じて多大な貢献をされた。</p> <p>同氏が座長を務めた六甲道駅南地区震災復興市街地再開発事業の「都市環境デザイン調整会議」は2008年に日本都市計画学会「関西まちづくり賞」と「都市計画学会賞計画設計賞」を受賞し、同氏が発足以来会長として尽力してきた地域まちづくりの支援組織「いきいき下町推進協議会」は、2014年度まちづくり功労者国土交通大臣表彰を受賞した。</p> <p>同氏は、日本都市計画学会の会員として長きにわたり活躍され、関西支部副支部長2年間、理事1年間、評議員11年間を務められ、関西支部活動と学会本部の活動にも多大な功績を残された。</p> <p>以上のように、氏は、実践的研究と地域社会への貢献は、高く評価されるべきところであり、功績賞を授与するに相応しいと判断した。</p>

国際交流賞	
受賞者	彭 光輝 [Kuang-Hui Peng]（台湾都市計画学会 元会長・台北科技大学名誉教授）
授賞理由	<p>彭光輝氏は、2011年から2014年にかけて台湾都市計画学会の会長を務められ、台湾、韓国、ベトナム、日本の都市計画学会が持ち回りで開催している国際都市計画シンポジウム(International Conference for Asian Pacific Planning Societies')の運営と発展に多大なるご尽力をなされた。特に、2012年の台湾開催の際には、ベトナム都市開発・計画協会を新たなメンバーとして迎えるべく主導的に調整役を務められ、現在の4学会体制を築かれた。同氏の存在なくしては、現在のシンポジウム体制はなかったと評価される。また、会長に就任される前には、台湾都市計画学会の国際交際担当責任者(2003年から2010年)も務め、2006年、2009年の台湾開催の際には、実行委員会責任者を務めた。さらに、以前に4学会共同で出版していた国際ジャーナルであるAsian Pacific Planning Reviewの編集にも長く携った。今日、国際都市計画シンポジウムが、4カ国の国際学術交流の場として発展的に運営されているのは、長年にわたる同氏のご尽力によるところが大きいと考える。</p> <p>また、同氏は、2012年には東京大学工学部都市工学科の客員研究員として滞在され、日本の都市計画教育及び日本の大学との交流にも深く携わり、長年にわたって我が国の都市計画研究の発展に力を尽くした。同氏は、学術及び教育だけでなく、台湾の都市計画行政の要職も務め、首都台北市の都市デザイン委員会に長くかかわった。その他の地方都市についても、アドバイザーとして要職を務められた。</p> <p>以上のように、同氏は、長年にわたって、都市計画の国際的交流に貢献を果たしてきており、国際交流賞を授与するに相応しいと判断した。</p>

日本都市計画学会 2019年 年間優秀論文賞受賞論文

(受賞者敬称略)

地方都市中心市街地の歴史的地区における近代以降の土地所有変遷に関する研究
-青森県黒石市中町地区南西部・南東部を対象として-

北原 麻理奈、窪田 亜矢

持続可能な都市の実現に向けた ZEH 街区形成のあり方に関する研究 -東京都大田区に着目して-

木村 奎太、村木 美貴

戦後旧都市計画法下における熱海市の風致地区を巡る議論と運用に関する研究 市議会での議論経過を中心に
西川 亮

距離帯と価格帯の異質性を考慮した無電柱化事業が地価に及ぼす影響
-1986年度から2017年度までの京都市電線類地中化実績データに基づいた分位点回帰分析-

大庭 哲治

ATM における還付金等詐欺の発生予測 -ATM の設置環境と犯罪の反復性に着目して-

大山 智也、雨宮 護

Desire path の再現に基づく歩行環境が歩行軌跡に与える影響の解明
-重み付きランダムドロネー网上的最短経路探索シミュレーション-

田端 祥太、新井 崇俊、本間 健太郎、今井 公太郎

日本都市計画学会

2019年 年間優秀論文賞 選考経過

2019年年間優秀論文賞は、当該年の1月から12月に発表された、都市計画論文集掲載論文（全204編）の中から優れた内容を有する論文を学術委員会にて慎重に検討を重ね、授賞候補を選定した。さらに候補選定結果を理事会に諮って、6編の授賞が決定した。

(参考)表彰対象

1. 表彰対象

論文

2. 表彰のための選考対象となる論文

表彰当該年の1月から12月に発表された発表会論文及び一般研究論文

論文名	地方都市中心市街地の歴史的地区における近代以降の土地所有変遷に関する研究 -青森県黒石市中町地区南西部・南東部を対象として-
著者	北原 麻理奈・窪田 亜矢
授賞理由	本論文は、黒石市の歴史的市街地を対象に、旧土地台帳・公図および土地所有者や行政へのヒアリングから、具体的な土地所有の変化の過程を詳細に把握したものである。評価できる点としては、第一に、「かぐじ」と呼ばれる敷地の裏側の扱いの変化を明らかにしたこと、第二にそのことにより現状の低未利用地の運用の資源性に焦点を当て、今後の有効利用の可能性を示唆していることが挙げられる。

論文名	持続可能な都市の実現に向けた ZEH 街区形成のあり方に関する研究 -東京都大田区に着目して-
著者	木村 奎太・村木 美貴
授賞理由	本論文は、環境問題・頻発する災害時への対応を念頭に、ZEH 街区形成を目指して、大田区内の住宅用途のみで構成される 1,754 街区を 4 タイプに分類したうえで、それぞれから代表地を選定し、建物更新を考慮した CO2 削減率、エネルギー自立度、CO2 削減費用を推計したものである。ZEH を核とした低炭素型市街地整備が防災性向上の面からも有効であること、戸建て住宅中心街区で有効性が高いことが示された。複数のシナリオ別に、詳細な CO2 排出量、電力量、整備費用が計算されており、地道な作業に基づく挑戦的な研究である。

論文名	戦後旧都市計画法下における熱海市の風致地区を巡る議論と運用に関する研究 -市議会での議論経過を中心に-
著者	西川 亮
授賞理由	本論文は、熱海市を対象に市議会議事録を中心とした史料の精緻な分析にもとづいて、旧都市計画法下において戦前期に指定された風致地区を巡って、戦後どのような議論が展開され、運用されてきたのか、具体的な観光開発の事例を取り上げながら整理し、民間の観光開発圧力によって風致地区指定範囲が変更されていく過程を詳らかにした論文である。評価できる点として第一に、公文書開示請求によって入手した 1947 年から 1974 年に至る市議会議事録を全て閲覧、重要発言を全て抽出したうえで、風致地区行政を巡る議論や運用の実態を丁寧に分析している点があげられる。第二に、熱海市を対象とした分析にとどまらず、風致地区行政における今日的な課題にまで踏み込んだ考察がなされた結果、今後の観光地における市町村主体の風致地区行政に対する示唆を得ている。

論文名	距離帯と価格帯の異質性を考慮した無電柱化事業が地価に及ぼす影響 -1986 年度から 2017 年度までの京都市電線類地中化実績データに基づいた分位点回帰分析-
著者	大庭 哲治
授賞理由	本論文は、京都市の電線地中化に関するデータを元に、無電柱化事業が地価に及ぼす影響について、複数の推定モデルを用いて、定量的に明らかにしようとしたものである。 評価できる点としては、第一に、事業実施エリアの従前地価の影響を考慮し、分位点回帰モデルを用いて、価格帯毎の影響の差違を明らかにしたことである。第二に、近年、地上設置機器の設置場所の問題から事業が長期化しているという点を踏まえ、分析対象を無電柱化完了済路線、抜柱完了済路線に整理し、事業路線からの距離帯毎の影響を明らかにしたことである。

論文名	ATM における還付金等詐欺の発生予測 -ATM の設置環境と犯罪の反復性に着目して-
著者	大山 智也・雨宮 護
授賞理由	本論文は、還付金等詐欺を効率的に抑止すべく、被害者が誘導されやすい ATM を統計的に特定するものである。被害の反復性を含む多数の環境要因から詐欺発生を予測するモデルを構築し、その信頼性を詳細に検証している。結論として、「平均貯蓄が高い郊外型の地区の、周囲に施設が少ない、地域の中心的なスーパーマーケットの外部にある ATM」が高リスクだという実用的な知見を得ることに成功している。これにより、欧米において侵入犯罪・街頭犯罪を対象として発展した地理的犯罪予測の技術が、我が国で関心の高い犯罪である特殊詐欺に対しても有用だと示し、都市空間解析の新たな地平を拓いている。

論文名	Desire path の再現に基づく歩行環境が歩行軌跡に与える影響の解明 -重み付きランダムドロネー网上的最短路探索シミュレーション-
著者	田端 祥太・新井 崇俊・本間 健太郎・今井 公太郎
授賞理由	<p>本論文は、草地や土の地面において人が繰り返し歩行することによって生じる Desire path の発生モデルを構築し、これに基づき歩行環境が歩行軌跡に与える影響を論じている。勾配や地面の仕上げに応じて空間の任意の部分における移動抵抗が定まるとし、この抵抗を小さくするよう人が移動するという想定に基づいて、発生する可能性の高い歩行経路、すなわち Desire path を推定している。このような経路は設計者の意図とは異なるものであり、景観や安全性などに影響を与える。本論文で提案された手法によって Desire path の発生を予測できるようにすることは、都市内の空間設計に有用であり、年間優秀論文に値する。</p>

